

巻頭言

“Impacting the World”

— 一貫教育が目指すもの —

伊原 幹治



戦後まもなく新制となった西南学院中学校（伊藤祐之校長）主導の下で、中高一貫が目指されたが結局は失敗し、多くの教員が解雇され西南を去った。そのような挫折を経験した中高が44年後に、今度は高等学校主導で1996年4月に結びついた。さらに、一貫教育の理念を推し進める目的で、同じキャンパス内に西南学院小学校が2010年4月に開校されたことで、小－中－高の一貫教育体制が整った。これら一連の変革は西南学院の歴史に、大きな画期として記録される出来事となった。

西南学院中学校と高校はそれまで同じキャンパス内にありながらも独立採算で運営される別々の学校であった。時代による変遷はあるものの、西南中に入学した生徒の多くは他の有力私立や公立高校へ進学し、西南高を第一志望にする生徒は少なかった。また、西南中から西南高、さらには西南大への推薦制度はあっても、そこに学院としての統一された意志は働いておらず、それ故、これらを「一貫教育」と呼ぶのはふさわしくない。

では、現在のような動きはいつ、どのようにして生まれたのか。そのきっかけは高校の男女共学化であった。創立以来、男子校として歩んできたが、これまで幾度か共学化が話題にはなったものの、まともな議論はされず、その都度立ち消えとなった。しかし、1992年に「男女共学委員会（5名）」が立ち上げられ、研究調査結果である「男女共学移行調査報告書－共学が学校を変える－」（第一版・第二版）が職員会議に提出された。その主張は、よりキリスト教学校としての建学の精神に近づくためであり、女性の社会進出、将来の少子化対策などが背景にあった。当時、西南とライバル関係にあった周辺私立高校はいずれも男女別学で、公立が共学という棲み分けがなされており、西南高の共学は受験生に新たな選択肢を与えるものであった。反対意見

として、男子校としての伝統や、女子教育への不安や反発、あるいは中学との一貫体制優先などの意見があった。学内を二分する激しい議論がなされたが、反対論のほとんどは共学後であっても実現が可能な内容であった。そして、年度末の職員会議では3分の2以上の賛成を得て、理事会がこれを決議した。こうして、制服の選定や施設面の改修などの準備期間を置いて、1994年4月、高校の共学がスタートした。この共学化は地域から大きな関心をもって迎えられ、これが一挙に高校のレベルと教育力の向上につながった。その結果、西南中からの希望者も増加し、一貫移行への双方の条件が整い、2年後に中学の共学化と共に中高一貫が実現した。更に、その一貫の内容を高めるためのステージである百道浜新校舎に2003年に移転し、これが後の西南学院小学校構想へつながっていった。

これらの変革の特徴は、共学と一貫がほぼ同時にセットで行われたことである。その相乗効果によって、高校に入学してくる生徒のほとんどが「専願」か、それに近い状態になった。こうして公立高校受験に失敗し挫折感をもって入学してくる生徒が大幅に減少し、これらの生徒にどのように対応するののかという「創立以来の課題」から解放された。また、生徒の能力が向上したことで勉学と部活の両立が可能な生徒が増え、女性教員の数も増加し、学校の雰囲気や教職員の意識にも大きな変化が生じた。中高6年教育によって、中学では部活の加入率が90%台に上昇し、高校では進学面の躍進となって表れた。また、「隣人（他者）に仕える」、「平和を作り出す」という本校のキリスト教教育は、単なる自己実現のための進路指導にとどまらず、より広い視野から「何のために生きるのか」、「何のために学ぶのか」という、青少年にとって避けては通ることができない「自分探し」への積極的な問題提起となっている。

昨年、小学校が開校したことで、保育所・幼稚園、大学をも含めた形で一貫教育を問う枠組みができあがり、このような視点から西南学院の教育が改めて問い直されることになった。間もなく創立100周年を迎える本学院は、新たな100年を視野に入れながら、どのようなメッセージ（“Impacting the World”）を発信するのが、これからの課題となる。

ドージャー先生によって蒔かれた種が大きな樹となり、私たちは、それをどのような林や森へと成長させていくのであろうか。